後期江戸語敬語体系における言語行動の〈場〉

小島俊夫

一　目標・方法・資料

本稿の目標は、後期江戸語敬語体系における言語行動の〈場〉について、階層差・男女差との関連において、考究することにある。

本稿において後期江戸語敬語体系と称するのは、十九世紀に刊行された滑稽本・人情本を資料とする後期江戸語について、対称代名詞・自称代名詞とりわけ対称代名詞の構成する主述呼応の諸形式が、段階A（下位の話し手から上位の話し相手への関係）・段階B（対等の関係）・段階C（上位の話し手から下位の話し相手への関係）・段階D（ののしりの表現）に区分され、さらに、段階Bが段階B_1と段階B_2、段階Cが段階C_1と段階C_2に区分されたものである。それは、敬語体系の部分（辞項 terms）が必ず敬語体系全体におけるその位置を指摘され、敬語体系全体のなかでの役割が記述されるように試みられる。[1]

言語行動は、言語行動の〈場〉に基づいて、構成される。本稿に謂う言語行動の〈場〉は、話し手と話し相手との関係、言語行動の〈場〉に登場する人・事・物と人・事・物の諸関係、言語行動の〈場〉に登場する人・事・物と話し手・話し相手との諸関係に基づいて、構成される。このため、採録される用例は、言語行動の〈場〉を構成する話し手・話し相手・人・事・物の各要素がじゅうぶんに充たされるよう、配慮されなければならない。[2]

小松寿雄氏は、一九八七年二月、論文「浮世風呂における女性の人称と階層」（『近代語研究』第七集）のなかで、敬語行動における登場人物の階層と人称のかかわりについて、「自称や対称の使用には、待遇意識が深く関与しており、それは階層より本質的であるとも言える。しかし待遇関係の考慮だけでは不十分なことも、しばしば認められる。」・「待遇関係を固定すれば、そこに使用される対称の相違は主として階層によるものと判明する。階層を無視すれば、対等関係における右のような多数の対称の使用の説明に窮するであろう。」と述べている。

本稿の筆者小島俊夫は、小松寿雄氏の上記の論文ならびに同氏の「浮世風呂における人称の階層差と男女差」（『近代語研究』第十集・一九九八10）を読んで、大いに触発され、後期江戸語敬語体系について、言語行動の〈場〉の視点から、考究しようと

試みる。

論を展開するに当たり、本稿の筆者は、次に示す幾つかの方法を用いる。

①論は、問題が対称代名詞または自称代名詞の構成する主述呼応の諸形式のなかのどの形式とかかわるかが問われる。たとえば、「オマエと呼ばれていることから見て……と思われる。」と違い、〈おまへ〉だけを論の対象にせず、「おまへ――（お）○○なさる」・「おまへ――○○する」などと把握し、「それが、後期江戸語敬語体系のなかで、どの範疇（段階 x）に位置するか。」と考えたのちに、論を進める。

②論は、必ず言語行動の〈場〉（話し手が、話し相手に対して、或ることがらについて、或る関係のもとに、語りかけること）の吟味を経て、進められる。たとえば、「オマエと呼ばれていることから見て……と思われる。」と結論を急がず、「なぜ、この言語行動の〈場〉において、〈おまへ〉と呼ばれているのだろうか。」と考えるのが本稿の筆者の方法のひとつである。したがって、多くの場合に、用例は、会話のかたちで、採録される。

③論は、十九世紀江戸市民の口頭語を反映する資料としての滑稽本・人情本・（必要なら、幕末に欧米人によって編纂された）日本語会話書・日本語文法書などから得られた用例群に基づいて、展開される。ひとつの文芸作品に、資料が、限定されない。その理由は、いずれかに偏した資料に基づく研究は、たとえその結論が是認される場合であっても、論証の材料が貧弱であったり、想像をさし挟まなくてはならなかったりする研究が少なくないからである。[3]

後期江戸語敬語体系の図式化

(1) 対称代名詞の構成する主述呼応の諸形式

段階	敬意の内容	主語	述語		
		対称代名詞	(例)待つ	(例)言ふ	現表命令
段階A	上位の話し手が、下位の話し相手をする敬意。最上級の敬意。互に対等な関係を反映。	あなたさま おまへさん おまへさま おめへさん おめへさま	お待ちなさいます。 〔お待ちになります。〕 お待ちあそばします。	おほせられます。 おつしやります。	お待ちなさいまし。 お待ちあそばせ。 おつしやつてくださいまし。
段階B1	話し相手に対する話をする礼を失しないだけの範囲で、敬意が広く使用。	おまへ 貴殿〔武士〕 貴公〔武士〕 貴所〔武士〕	〔お〕待ちなさる。 お待ちだ。 〔女〕	言ひなさる。 おつしやる。 おいひだ。 〔女〕	待ちなされ。 お待ちなさい。 お待ち〔な〕。 〔女〕
段階B2	対等な人間関係をもつとも基本的に反映することば。	おまへ おめへ 貴様 貴公〔男〕 ぬし	待つ。	言ふ。	待ちなさせへ。 待ちなさせへ。 待ちねへ。 待たつし。
段階C1	上位の話し手が下位の話し相手に対して使う場合に、粗野で感情の隔意が、交流と下層の階級に多く見られる。	てめへ〔女〕 おのし こなた 貴様	待つ。	言ふ。	待て。 待たりよ。 待つた。
段階C2	上位の話し手が下位の話し相手にし相手に対して敬意を故意に反映する意をよって、〔場合〕尊敬語をしばづかいをする。〕を誇示親愛する。	おまへ おめへ 貴様	〔お〕待ちなさる。 お待ちだ。 〔女〕	いひなさる。 おつしやる。 お言ひだ。 〔女〕	待ちなされ。 待たつしやい。 待たつせへ。 待ちやれ。 待つてくりやれ。
段階D	親しみとの愛ばの互に対等な粗野感情の隔意が、流と下層の階級に多く見られる。	うぬ われ おのれ てめへ 〔貴様〕	待ちやがる。 待ちをる。 待つてけつかる。	ぬかす。 ほざく。ぬかし やがる。ほざき やがる。言つて けつかる。	待ちやがれ。 待て。ぬかせ。 ぬかやがれ。 ほざけ。ほざき やがれ。言へ。

(2)　自称代名詞の構成する主述呼応の諸形式

段階	敬意の内容	主語	述語
		自称代名詞	(例)待つ　言ふ
段階Ⅰ	段階Aに同じ	わたくし 拙者[武士]	お待ち申します。 お待ち致します。 申し上げます。
段階Ⅱ	段階B_1に同じ	わたし わしつち 拙者[武士]	お待ち申す。 待つて進ぜる。 申し上げる。
段階Ⅲ	段階B_2に同じ	わたし おれ・お いらわつち	待つ。 言ふ。
段階Ⅳ	段階C_1に同じ	わたし おれ・お いら 拙者[武士]	待つ。 言ふ。
段階Ⅴ	段階C_2に同じ	わたし おれ・お いら 拙者[武士]	お待ち申す。 待つて進ぜる。 申し上げる。
段階Ⅵ	段階Dに同じ	おれ・お いら (おれさま)	待つ。 言ふ。

図表(1)・(2)に示されていない辞項、たとえば、〈御自分様〉(いろは文庫・第四十六回)・〈みども〉(七偏人・二編中)・〈モシ・コレ・コウ〉(浮世風呂・四編下)その他については、これらの図表の主述呼応の形式に当てはめて、位置づけられるべきである。

本稿の資料は、左のとおりである。

一八〇九　文化　六　浮世風呂(新日本古典文学大系・岩波書店)
一八三六　天保　七　いろは文庫(有朋堂文庫・有朋堂)
一八三七　天保　八　娘太平記操之早引(帝国文庫・博文館)
一八三九　天保一〇　閑情末摘花(日本名著全集・同刊行会)
一八四三　天保一四　夢酔独言(東洋文庫・平凡社)

さきに掲げた〈後期江戸語敬語体系の図式〉ならびに〈本稿の内容〉を支える資料については、『後期江戸ことばの敬語体系』(一九七四)を参照せられたい。

二　男性の自称・対称・呼称

小松寿雄氏は、男性町人の自称・対称・呼称について、登場人物の個々に項目を設け、次のように、それぞれ、述べている。

衰微
自称　オラ　呼称(ママ)　貴公、～公。

聞き手はいずれも太鼓持ちの鼓八。鼓八は衰微が放蕩をかさねていたころ、ひいきにした太鼓持ちである。自称も対称も目下に対するものであるが、対称には旦那と太鼓持ちの関係が残っている。

●ひさしぶりで貴公のやつかましいを聴た(近代語研究・第十集・一七二頁)

幇間鼓八の上層町人衰微に対する敬語行動が、

鼓八――衰微
あなたはモシ、衰微(すいび)さんではござへませんか

衰微――鼓八
ホウ鼓八(こはかう)公か(浮世風呂・四編中)

のように、敬語体系の段階A・段階Ⅰ(あなた――ござへます)に位置づけられることから、鼓八に対する衰微の敬語行動が「自称も対称も目下に対するものである」ことは、肯定できる。

試みる。

論を展開するに当たり、本稿の筆者は、次に示す幾つかの方法を用いる。

①論は、問題が対称代名詞または自称代名詞の構成する主述呼応の諸形式のなかのどの形式とかかわるかが問われる。たとえば、「オマエと呼ばれていることから見て……と思われる。」と違い、〈おまへ〉だけを論の対象にせず、「おまへ――（お）○○なさる」・「おまへ――○○する」などと把握し、「それが、後期江戸語敬語体系のなかで、どの範疇（段階 x）に位置するか。」と考えたのちに、論を進める。

②論は、必ず言語行動の〈場〉（話し手が、話し相手に対して、或ることがらについて、或る関係のもとに、語りかけること）の吟味を経て、進められる。たとえば、「オマエと呼ばれていることから見て……と思われる。」と結論を急がず、「なぜ、この言語行動の〈場〉において、〈おまへ〉と呼ばれているのだろうか。」と考えるのが本稿の筆者の方法のひとつである。したがって、多くの場合に、用例は、会話のかたちで、採録される。

③論は、十九世紀江戸市民の口頭語を反映する資料としての滑稽本・人情本・（必要なら、幕末に欧米人によって編纂された）日本語会話書・日本語文法書などから得られた用例群に基づいて、展開される。ひとつの文芸作品に、資料が、限定されない。その理由は、いずれかに偏した資料に基づく研究は、たとえその結論が是認される場合であっても、論証の材料が貧弱であったり、想像をさし挟まなくてはならなかったりする研究が少なくないからである。[3]

後期江戸語敬語体系の図式化

(1) 対称代名詞の構成する主述呼応の諸形式

段階	敬意の内容	主語	述語		
		対称代名詞	(例)待つ	(例)言ふ	命令表現
段階A	上位の話し手が相手の対話する最上級の敬意。相互の対等の対話する場合には、最上級の社交や教養を反映。	あなたさま おまへさん おまへさま おめへさん おめへさま	お待ちなさいます。 〔お待ちになります。〕 お待ちあそばします。	おほせられます。 おつしやります。	お待ちなさいまし。 お待ちあそばせ。 おつしやつてくださいまし。
段階B_1	話し相手に対する礼を失わない範囲で、敬意のいだく使用。	おまへ 貴殿〔武士〕 貴所〔武士〕 貴公〔武士〕	〔お〕待ちなさる。 〔女〕お待ちだ。	言ひなさる。 おつしやる。 〔女〕おいひだ。	待ちなされ。 お待ちなさい。 お待ち〔な〕。 〔女〕待ちなされ。
段階B_2	対等な人間関係を基本的に反映することば。	おまへ おめへ 貴様 貴公〔男〕 ぬし	待つ。	言ふ。	待ちな。 待ちなせへ。 待ちねへ。 待たつし。
段階C_1	上位の話し手が下位の話し手に対して使用。相互に対等の話し相手に対して使用する場合、粗野で隔意なき感情が、交流と大きく隔たる。	おまへ おめへ 貴様 〔女〕てまへ おのし こなた	待つ。	言ふ。	待て。 待つたりよ。 待つた。
段階C_2	上位の話し手が下位の話し手に対して使用。反映する敬意を故意に使ってづかいをしばしば尊敬語を用いる。場合によっては親しみの裏がえしの愛を誇示する。	おまへ おめへ 貴様	〔お〕待ちなさる。 〔女〕お待ちだ。	いひなさる。 おつしやる。 〔女〕お言ひだ。	待ちなされ。 待たつしやい。 待たつせへ。 待ちやれ。 待つてくりやれ。
段階D	親しみと親愛感のない粗野な感情の隔たる場合、対話の交流と下層階級に多く見られる。	うぬ おのれ てめへ 〔貴様〕	待ちやがる。 待ちをる。 待つてけつかる。	ぬかす。 ほざく。ぬかしやがる。ほざきやがる。言つてけつかる。	待ちやがれ。 待て。ぬかせ。 ぬかしやがれ。 ほざけ。ほざきやがれ。言へ。

(2)　自称代名詞の構成する主述呼応の諸形式

段階	敬意の内容	主語 自称代名詞	述語 (例)待つ	述語 言ふ
段階Ⅰ	段階A に同じ	わたくし 拙者〔武士〕	お待ち申します。お待ち致します。申し上げます。	
段階Ⅱ	段階B_1 に同じ	わたし わしわつち 拙者〔武士〕	お待ち申す。待つて進ぜる。申し上げる。	
段階Ⅲ	段階B_2 に同じ	わたし おれ・おいら わつち	待つ。	言ふ。
段階Ⅳ	段階C_1 に同じ	わたし おれ・おいら 拙者〔武士〕	待つ。	言ふ。
段階Ⅴ	段階C_2 に同じ	わたし おれ・おいら 拙者〔武士〕	お待ち申す。待つて進ぜる。申し上げる。	
段階Ⅵ	段階D に同じ	おれ・おいら（おれさま）	待つ。	言ふ。

図表(1)・(2)に示されていない辞項、たとえば、〈御自分様〉（いろは文庫・第四十六回）・〈みども〉（七偏人・二編中）・〈モシ・コレ・コウ〉（浮世風呂・四編下）その他については、これらの図表の主述呼応の形式に当てはめて、位置づけられるべきである。

本稿の資料は、左のとおりである。

一八〇九　文化　六　浮世風呂（新日本古典文学大系・岩波書店）
一八三六　天保　七　いろは文庫（有朋堂文庫・有朋堂）
一八三七　天保　八　娘太平記操之早引（帝国文庫・博文館）
一八三九　天保一〇　閑情末摘花（日本名著全集・同刊行会）
一八四三　天保一四　夢酔独言（東洋文庫・平凡社）

さきに掲げた〈後期江戸語敬語体系の図式〉ならびに〈本稿の内容〉を支える資料については、『後期江戸ことばの敬語体系』（一九七四）を参照せられたい。

二　男性の自称・対称・呼称

小松寿雄氏は、男性町人の自称・対称・呼称について、登場人物の個々に項目を設け、次のように、それぞれ、述べている。

衰微
自称　オラ　呼称（ママ）　貴公、～公。

聞き手はいずれも太鼓持ちの鼓八。鼓八は衰微が放蕩をかさねていたころ、ひいきにした太鼓持ちである。自称も対称も目下に対するものであるが、対称には旦那と太鼓持ちの関係が残っている。

●ひさしぶりで貴公のやつかましいを聴た（近代語研究・第十集・一七二頁）

幇間鼓八の上層町人衰微に対する敬語行動が、

鼓八――衰微
あなたはモシ、衰微（すいび）さんではごぜへませんか

衰微――鼓八
ホウ鼓八（こはかう）公か（浮世風呂・四編中）

のように、敬語体系の段階A・段階Ⅰ（あなた――ごぜへます）に位置づけられることから、鼓八に対する衰微の敬語行動が「自称も対称も目下に対するものである」ことは、肯定できる。

だが、次のような会話は、上位者衰微に対する下位者鼓八の敬語行動として、是認されるであろうか。それらは、段階B1（お前――お生れなさる）・段階B2（お前――やツかましい・なしだ）の敬語行動に位置づけられるべきである。

衰微――鼓八
銭がつかへねへので拠なく老実さ
鼓八――衰微
やツかましい（同）
衰微――鼓八
月〳〵タツタ十両ヅゝ
鼓八――衰微
ハテ結構な御身分だ。モシ衰微さん、能月日の下でお生れなすつた。其上にまだ御不足か。ヤ欲には頂なしだぞ。ハゝゝゝ（同）

では、幇間は、その客すじの上層町人に対して、何故に、段階Aでなく、段階B1・段階B2の敬語行動（なかでも、「やツかましい」のようなぞんざいなことばづかい）を選ぶのであろうか。それは、町人社会本来の制約から離脱して、人為的・職域的な〈敬語行動の場〉を、特殊な社会習慣として、双方が、構築しているからである。[4]

左の用例群が、その事実を、示す。

幇間豆八――上層町人繁兵衛
時にモシそれぢやア折角のお催しもまづ大かたは御延引かね

繁兵衛――豆八
なアにさう云心でもないが見なさる通りの辞宜だからわたしやアかまはねへが貴公にちつとお気の毒だ
豆八――繁兵衛
そりやモシわたくしになら御心痛は御無用どうでお供でまゐる事だから（娘太平記操之早引・第三回）

と、ぞんぞいな口（「御延引か」・「御無用」・「事だ」）を「問屋株の八百屋」の若旦那（客すじ）に向かってきく幇間が、若旦那の妻に対しては、（同じ時に、同じ部屋で）町人社会本来の制約にしたがって、

ヘヱさやうでございましたかそれは散々な事イヱもうわたくしも霍乱はいたしましたがヤなか〳〵どうして苦しいのなんのと口でいふやうな事ぢやアございません（同）

のように、上位の話し相手に対する下位の話し手の最上級の敬意（段階A・段階I）を表わす敬語行動をとっている。

同様の用例として、幇間が、豪商の若旦那（客すじ）に対して、

又そんなつまらねへ事を被仰ます、貴公も男ぢやアありませんか、一旦斯うと憶ひ込んだ女なら、邪でも非でも夫婦になつて、百万年も長寿をして添遂げやうと思はねへぢやアなりやせんぜ、あんまり君のお心が弱過ぎるから、僕が肺肝を苦しめる事最甚しサ、其処等は少し御推もじあつて

然るべしサネ（いろは文庫・第百六回）

と、ぞんざい（「思はねへぢやアなりやせんぜ」・「甚しサ・「然るべしサネ」）に「自分独で呑込んだやうに喋り廻して居る」（同）にかかわらず、若旦那の家の番頭に向かっては、町人社会本来の制約にしたがって、

是は忠助さんお出でなさい、此程から毎度御足労を掛けた事も、妻から承つて居りますから、是非お店へ上らないでは済みませんが、彼一件の埒の明かないので、何だか敷居が高いやうで、つい御無沙汰になりました（同・第百二回）

のように、上位の話し相手に対する下位の話し手の最上級の敬意（段階A・段階Ⅰ）を表わす敬語行動をとっている。

要するに、江戸市民社会には、幇間とその客すじの上層町人との間で交わされるぞんざいなことばづかいが、〈特殊な社会習慣〉として、確立されていた。「自称も対称も目下に対するものである。」[15]だけでは説明できないぞんざいな言い方が、双方の間に、許されるのである。そして、幇間は、その客すじでない上層町人（男性あるいは女性）と会話する際には、江戸町人社会本来の制約にしたがって、上位の話し相手に対する下位の話し手の最上級の敬意（段階A・段階Ⅰ）を表わす敬語行動をとるのである。

ところで、『浮世風呂』は、

衰微――鼓八
一寸おらが内へ歩びねへ直に此横町だ。酒は相かはらず樽酒だから、些ばかり迎るがいゝ
鼓八――衰微
それはおひさしぶりでありがたい（四編中）

と、鼓八が衰微宅に招待されることを、示している。このとき、後期江戸語敬語体系下に身を置くこの作品の読者たちは、かならずや、〈上層町人衰微の妻〉に対する幇間鼓八のことばづかいが江戸町人社会本来の制約に基づくもの（段階A）であることを、反射的に喚起したに違い無い。同時に、読者たちは、鼓八の心をよぎる（衰微の妻に対する）気まずさを思い浮かべたはずである。少なくとも、作者式亭三馬は、創作の筆を、その方向に、運んだことと考えられる。たしかに、『浮世風呂』は、江戸語研究の貴重な資料のひとつである。だが、それにさき立って、『浮世風呂』は、まぎれも無く、文芸作品なのである。文芸作品を言語研究の資料として選ぶとき、言語研究における言語行動の〈場〉の検討は、文芸としての〈場〉の展開との関連から、眼をそらすことができないであろう。

小松寿雄氏は、俳助・闇雲屋吉郎兵衛（やみ吉）について、次のように、それぞれ、述べている。

俳助
自称　ワタクシ　　呼称（ママ）　オマエサン、～サン

聞き手はいずれも闇雲屋吉郎兵（ママ）（やみ吉）。俳助は言葉遣いの過度に丁寧な商人のカリカチュアであろう。やみ吉からオマ

エと呼ばれていることから見て、上層ではなく中層の上くらいかと思われる。

●おまへさんはいつも御丈夫さまで、お仕合様でござりますぞ。

闇雲屋吉郎兵（やみ吉）

自称　なし　呼称　オマエ、～サン、～公。

このやみ吉も、俳助同様商人で、複数の奉公人を抱えている。俳助に対してはオマエと～サン、月八に対しては～サン、ぶた七に対しては～公を用いている。～公は親密な遊び仲間では、同輩間で相互に用いられるが、そうでなければかなり無遠慮な呼称になる。ぶた七は、作中特別扱いを受けている人物で、～公が使われているのはそのせいである。（近代語研究・第十集・一七三頁）

やみ吉と俳助は、次のような会話を、交わしている。

やみ吉――俳助

ヤ俳助さんお早うございました

俳助――やみ吉

ヤ是は〳〵、闇雲屋の吉郎兵衛さん。お早うござります。扨はやお結構なお日和様でござります。おまへさんはいつも御丈夫さまでお仕合様でござりますぞ。ハイ〳〵。此お天気の御都合は申ぶんなしぢやが、お暑さはどういたしたものでござりませう

やみ吉――俳助

さ様でございますネ。兎角残暑がつようございます

俳助――やみ吉

ハイ〳〵。さやうにござります。別しておまへ様は御肥満でお出なさるから、お暑のお凌はお大体様ではござりますまい。ハイ〳〵。トキニ、最早お盆が参じましたナ。おまへさんではお人ずくなで、さぞおとりこみ様でござりませう。ハイ〳〵。イヱモお大体様ではござりませぬ。ハイ〳〵。わたくし抔はお得意様のお蔭様で、まづナ、おまへさん、他人様のお足をも歩せ申さず、ハイ〳〵、又外様へお払をいたゞきにもまゐらず、まことにナお前さん、ハイ〳〵、お節句前しらずでござります。ハヽヽヽヽ

やみ吉――俳助

それは何より能うございますネ

俳助――やみ吉

イヱハヤ、是と申スも御先祖さまのお蔭様でござりまして、ハイ〳〵、おありがたい事でござります

やみ吉――俳助

ほんに、お前で石臼がお入なさるだらう。虎どんでもとりに遣さいまし。イヤ〳〵、此方からもたせて上やう（浮世風呂・四編下）

小松寿雄氏は、町人俳助の階層について、「やみ吉からオマエと呼ばれていることから見て、上層ではなく中層の上くらいかと思われる。」と、述べている。「オマエと呼ばれていること」を論拠とする小松寿雄氏の〈論の進め方〉は、対称代名詞単独の用いられ方に着眼している。これとは異なり、小島俊夫の〈論の進め方〉は、対称代名詞・自称代名詞の構成する主述呼

応の形式に着眼する。俳助に対するやみ吉のことば「遣さいまし。」・「さ様でございますネ。」などの述語には、〈お前さん・わたくし〉が、主語として、潜在的に呼応（段階A・段階I）していると考えられる。ゆえに、俳助（段階A[6]・段階I）とやみ吉（段階A・段階I）とは、対等（相互に最上級の社交や教養を反映して）の会話を交わしているものと考えられる。ゆえに、俳助についての、「やみ吉からオマエと呼ばれていることから見て、上層ではなく中層の上くらいかと思われる。」という見解は、その根拠を失うのである。

では、なぜ、俳助は、（一度だけ）「やみ吉からオマエと呼ばれている」のだろうか。類似の用例●（金溜屋のおかみさん）対▲（六十ぢかきばあさま）の会話の〈場〉の吟味から、論を、進めよう。

●――▲

ホンニお孫さまが痘瘡を遊ばしたさうでございますネ。夫でも至極お軽い御様子で別してお愛たう

▲――●

ハイサおまへさんネ。暮におしつめて人手はございませずネ、大きに苦労致ましたが、仕合と軽うございまして、ホンニ〳〵御方便な物でございます。母親がおまへ御ぞんじの通りネ、疱瘡が重うございましたから、どうかと存ましたが、案じるより産が易いで顔にはわざつと五粒ばかり、手足に漸〳〵算るばかりでございました（浮世風呂・三編上）

●（段階A・段階I）と▲（段階A・段階I）とは、対等（相互に最上級の社交や教養を反映して）の会話を交わしている。この会話の〈場〉において、▲は、〈おまへさん〉を、この箇所のほかに、前後に四回用いている。それらのなかで、一箇所、「おまへ御ぞんじの通りネ、」と、〈おまへ〉が混交している。混交の事情については、この〈場〉に限るなら、▲に「六十ぢかきばあさま」と注記のあることを拠りどころとして、本稿の筆者に或るひとつの見解[7]がある。だが、その見解に立つとしたら、「やみ吉は、六十ぢかきぢいさま」かと言うことになり、事情が客観的に解明されることは無い。後考に俟つ。

俳助が一度だけ「やみ吉からオマエと呼ばれていること」の事情について、俳助対やみ吉の言語行動の〈場〉に限るなら、本稿の筆者に或るひとつの見解がある。

俳助――やみ吉

石臼をばお手近くへお出しなされて差おかれますやうに、お店のお方〳〵へおつしやりおかれまして下さりますやうに、ハイ〳〵

やみ吉――俳助

ナニサ、持せて上ゲませう（浮世風呂・四編下）

における「持せて上ゲませう。」とさきに掲げた用例のなかの「もたせて上やう。」とを比較すると、「もたせて上やう。」には、俳助に語りかけるよりも、やみ吉が自分自身に語りかける様相がある。〈ます[8]〉の有無。さきに掲げた用例のなかの「お

まへさんではお人ずくなで、さぞおとりこみ様でござりませう。」と「お前で石臼がお入なさるだらう。」とを比較すると、「お入なさるだらう。」には、俳助に語りかけるよりも、やみ吉が自分自身に語りかける様相がある。〈でござります〉と〈だ〉の差異。ただし、これらの様相は、いずれも双方が相互に段階Aの形式で会話を交わす〈場〉にあってこそ成立する。

さて、要因は、もう一つ、考えられる。それは、『浮世風呂』の作者式亭三馬の〈心〉のなかにある。ゆえに、言語研究としては、採り上げるべきでない領域かも知れない。

この要因の解明には、俳助対やみ吉の会話の〈場〉にさき立つぶた七・月八対やみ吉の会話の〈場〉について、吟味する必要がある。

やみ吉――ぶた七
ヲヤ〳〵ぶた公、かみがた唄かたまらねへぜ
ぶた七――やみ吉
たまね〳〵（浮世風呂・四編下）

ぶた七――月八・やみ吉
アハゝゝゝ。おめ、おめ、おめへ達ア、おれが唄ふ所、みんな取つてしまつた、〳〵の。イヒゝイヒゝゝゝ
月八――ぶた七
ヤお早いの
ぶた七――月八
あい（同）
やみ吉――月八
月八ぞんかみがたの時花唄は、どうも人がらがいゝの
月八――やみ吉
やさしくて、どうもいへねへ。すべて上方唄は品がいゝ。江戸は半太夫河東此ふたつにとゞまるよ。流行唄も諸国のいりごみだから、下卑た田舎節のはやるはうらみだぞ（同）

やみ吉・ぶた七・月八の三人は、相互に段階B_2（対等な人間関係を、もっとも基本的に反映することばづかい）の範疇に位置づけられて、会話している。[9] 小松寿雄氏も、三人について、「（〜公は、）親密な遊び仲間では、同輩間で相互に用いられるが、そうでなければかなり無遠慮な呼称になる。」と、述べている。

作品のおもしろさは、やみ吉が、無遠慮ですらある親密な会話の〈場〉から、「言葉遣の過度に丁寧な商人の caricature」での会話の〈場〉へと、急転する点にあろう。[10] この急転により、やみ吉は困惑し、辟易し、段階Aの会話のなかに、「お前で……お入なさるだらう。……もたせて上やう。」（段階B_1）が、ひとりごとのように、われ知らず、混交したのであろうと考えられる。後考に俟つ。

要するに、俳助対やみ吉の〈敬語行動の場〉におけるやみ吉のことばづかいは、その述語群の諸形式（段階A・段階I）から考えて、それらの形式に呼応する主語群は、当然、〈お前さん・わたくし〉であり、それらが潜在的に呼応していると考えられる。ゆえに、俳助についての「やみ吉からオマエと呼ばれていることから見て、上層ではなく中層の上くらいかと思われ

る。」という見解は、その根拠を失うのである。また、この敬語行動の〈場〉において、やみ吉（および▲〈六十ぢかきばあさま〉）の用いた〈お前〉は、その構成する述語の形式（段階B[1]）から考えて、なんらかの要因（後考に俟つ。）による混交であろうと考えられる。この敬語行動に、男女差は、見いだされない。

三　女性の自称・対称・呼称

対等の関係にある女性相互に用いられる対称代名詞〈おまへ・おめへ〉について、小松寿雄氏は、次のように、述べている。

下層と思われるおにくがオマエを二回使用しているところから見て、下層であっても女の子同士は対称にオマエを用いたと言えよう。先に述べたように下層の成人女性は、仲間同士ではオメエを使っていた。「浮世風呂」の女性に限って言えば、オマエの相互使用は、右の少女間のものだけであって、成人女性間には認められない。これが偶然のことなのか、一般的なことなのか、今は判断をさしひかえたい。

「……お鳶さん、く。おめへモウあがるか。最ちつとつき合な。今にもう一返這入て来て一緒に上らアな。コウ〳〵。昨夜はお忝け。あのまア、おらが内を聞ねヘナ。……

「ヲヤ〳〵、もつてへねへ事をいふのう。おめへがそんなことをいふが悪いはな

▲「おかみさんどうしなすつた。おめへの内じやア皆お達者か　●アイサ。捨る神あれば助る神ありとやらで、内で亡てもどうやら斯やらたべつゞいてをります……夫でもおめへ、泣子と地蔵にやア、かなはねへといふから病人のいひなり三宝にして上なせへ（近代語研究・第七集・四一〇頁）

ところで、「下層の成人女性は、仲間同士ではオメエを使っていた。」・「オマエの相互使用は、……（下層の）成人女性間には認められない。」と述べられている〈おまへ〉の用例が、小島俊夫の調査によれば、ほかならぬ『浮世風呂』に、左のとおり、存在する。

おたい――おさみ
いつでもしまひは鼾さ。ヲヤおまへモウお仕舞が出来たネ
おさみ――おたい
アイ、今朝お櫛さんが一番に来て呉れたからサ。おまはんのは誰にお結はせだ（二編上）

〈おまへ〉を用いるおたいは、「いつでもしまひは」・「モウお仕舞が」（〳〵 ai 〳〵）と言い、「いつでもしめへは」・「モウお仕舞へが」（〳〵 ele 〳〵）とは言わない。これと異なり、

おばち――おさみ
おめへといふものはしよにんな者だの。さうしなせへ。随分つき合をしらねへが能のさ。あれほど待て居て呉なといふのに
おさみ――おばち

それでもおめへのお飯は埒が明ねへものを

おばち――おさみ

アイサ、大喰だからね。左様さ。至極おまへさまのが御尤な筋さ（同）

のように、〈おめへ〉を用いるおばち・おさみは、「しなせへ」・「つき合」・「しらねへ」・「明ねへ」（＼e'e＼）と言い、「しなさい」・「つき合」・「しらない」・「明ない」（＼ali＼）とは言わない。しかも、おばちは、〈おまへさま〉を用いるにさき立って、「お早いの」というおさみの挨拶に対して、「お早いじやアねへはな」（同）と、応じている。二編上・お山の用例省略。

要するに、後期江戸語敬語体系下に身を置く〈下層階級の女性たち〉は、対等の敬語行動の〈場〉においては、或る時には〈おまへ〉と言い、或る時には〈おめへ〉と言う人々、およびそのいずれかのみを用いる人々から成ると考えられる。したがって、対等の関係にある〈下層階級の成人女性たち〉がオメエのみを用い、オマエを用いないという見解は、否定されることになる。

小松寿雄氏は、「コナタとオノシは、両方とも目下に使用されている。コナタは、上層女性では、しうとめ→よめの関係で二例用いられている。オノシは、上層女性では、しうとめ→下女、よめ→下女の関係で使われている。もちろんこの二つの語は、上層女性だけが使うものではないが、これらの使用によって音訛を利用したオメエの使用が回避できたのではないかと思う。」（近代語研究・第七集・四一四頁）と述べ、下位の話し相手に対して上層町人の女性の用いる対称代名詞として、〈オマへ・コナタ・オノシ〉（同・四一四頁）を挙げ、下層町人の女性のそれは、〈テメエ〉（同・四一六頁）を掲げている。

ところで、上層町人[11]の女性が下位の話し相手に対して、〈其方〉を用いている。

富商の娘――自家の丁稚徳松

ホンニ徳松一言もないヨ。其方たちの眼からさへ不孝とみえる吾儕が放埒（閑情末摘花・第二十七回）

この時代、上層町人の女性は、丁稚に向かって〈お前〉とは、言えないのである。この女性が、

夫ならまアお前こゝを何様しやうとお思ひだヱ（同・第十二回）

と、まれに〈お前――お○○だ〉のような言い方（段階 B_1）をする話し相手は、恋人の上層町人[12]であり、その男性に対しても、女性は、

私は熟考へますと不測でなりませんは。なぜと言つてお見なさい。お前さんと竟した事から斯なつて。同所に死なふとまでは。努にもおもはない事てございますものヲ（同・第八回）

のように、〈お前さん・私〉を用いるのを通常とする。江戸語の敬語の性格は、話し手・話し相手および〈言語行動の場に登場する人・事・物〉それぞれを制約する〈身分の枠組み〉での位置づけがそのまま〈敬語体系の枠組み〉での位置づけに移行されると、考えられる。階級が、言語を、つよく制約する。

富商の若旦那――隣家の下女
誠に気の毒でならねへ。お前跡でよく詫ごとをしてお呉
隣家の下女――富商の若旦那
ホヽヽ左様でございますか。まだお年が入ツしやらないものだから。戯言をも真にお受遊ばしますのサ（同・第四回）

のように、「お前――してお呉」（段階B[13]）の形式を用いて、一見、対等の話しぶりをしているように見えながら、実は、対等の話しぶりでない――その根拠として、隣家の下女の側からは、若旦那に対して、対等のことばづかいは、許されなかった。――用例が見いだされる。このような〈お前〉が、男性・女性を問わず、下位の話し相手に対する用法（段階C_1）と位置づけられない理由は、〈てまへ・てめへ〉が下位の話し相手に対する用法をもっぱらとするに反し、〈おまへ・おめへ〉が対等の話し相手に対する用法をその基本とするからである。江戸語の敬語体系では、男性・女性を問わず、階層・身分・職業などによる制約下に、〈てまへ・てめへ・こなた・おのし〉などの段階C_1のことばづかいが根づよく、幅ひろく用いられ、〈おまへ・おめへ〉は、いまだ〈下位の話し相手に対する用法〉をになう語になり切っていなかったと認められる。段階C_2（上位者が下位者に裏がえしの親愛を示す。）の見解も可能。

要するに、後期江戸語敬語体系下に身を置く〈上層町人の女性〉が下位の話し相手に対して用いる対称代名詞は、〈こなた・おのし〉のほかに、まれに〈てまへ〉が用いられる。〈おまへ〉は、対等の関係の〈言語行動の場〉において用いられることを基本とし、かりに下位の話し相手に〈おまへ〉が用いられるとすれば、話し手が話し相手に対し、なんらかの要因（ばつのわるさ・ひけめ・その他）によって、見せかけの〈対等〉をよそおっていることが考えられる。段階C_2の見解も可能。

四　結　論

『浮世風呂』の敬語（待遇語）を〈人称と階層差・男女差〉の視点から考察する小松寿雄氏の試みに対し、本稿の筆者小島俊夫は、対称代名詞・自称代名詞の構成する主述呼応の諸形式による後期江戸語敬語体系を、言語行動の〈場〉の視点から、考察して、次の四点が明らかになった。

①江戸市民社会には、幇間とその客すじの上層町人との間に交わされるぞんざいなことばづかいが、〈特殊な社会習慣〉として、確立されていた。「自称も対称も目下に対するものである。」だけでは説明できないぞんざいな言い方が、双方の間に、許されるのである。そして、幇間は、その客すじでない上層町人（男性あるいは女性）と会話する際には、江戸町人社会本来の制約にしたがって、上位の話し相手に対する下位の話し手の

最上級の敬意（段階A・段階I）を表わす敬語行動をとっている。

②俳助対やみ吉の〈敬語行動の場〉におけるやみ吉のことばづかいは、その述語群の諸形式（段階A・段階I）から見て、それらの形式に呼応する主語群は、当然、〈お前さん〉（段階A）・〈わたくし〉（段階I）であり、それらが潜在的に呼応していると考えられる。ゆえに、俳助についての「やみ吉からオマエと呼ばれていることから見て、上層ではなく中層の上くらいかと思われる。」という見解は、その根拠を失うのである。また、この敬語行動の〈場〉において、やみ吉（および▲〈六十ぢかきばあさま〉）の用いた〈お前〉は、その構成する述語の形式（段階B_1）から考えて、なんらかの要因（後考に俟つ。）による混交であると考えられる。この敬語行動に、男女差は、見いだされない。

③後期江戸語敬語体系下に身を置く〈下層階級の女性たち〉は、対等の敬語行動の〈場〉において、或る時には〈おまへ〉と言い、或る時には〈おめへ〉と言う人々、およびそのいずれかのみを用いる人々から成ると考えられる。したがって、対等の関係にある下層階級の成人女性たちがオメエのみを用い、オマエを用いないという見解は、否定されることになる。

④後期江戸語敬語体系下に身を置く〈上層町人の女性〉が下位の話し相手に対して用いる対称代名詞は、〈こなた・おのし〉のほかに、まれに〈てまへ〉が用いられる。〈おまへ〉は、対等の関係の〈言語行動の場〉において用いられることを基本とし、かりに下位の話し相手に〈おまへ〉が用いられるとすれば、話し手が話し相手に対し、なんらかの要因（ばつのわるさ・ひけめ・その他）によって、見せかけの〈対等の関係〉をよそおっていることが考えられる。段階C_2の見解も可能。

【注】

（1）小島俊夫「後期江戸語における対称代名詞と待遇表現」（『国語』第六巻第一号・一九五七9）同『後期江戸ことばの敬語体系』第二章（一九七四）同「滑稽本・人情本にあらわれた「ワタクシ・ワタシ・オレ・オイラ」と敬語表現体系」（『国語学』第七九集・一九六九12）同『後期江戸ことばの敬語体系』第四章（一九七四）

（2）服部四郎「文法的意義と言っても、話し手の「意識」と呼ばれる内的世界――即ち「内的場面」――のみに関係するのではなく、外界すなわち外的場面にも関係がある。特に代名詞の意義や敬語の研究では、話し手と聞き手その他の外的場面との関係を考察する必要がある。」（「日本の記述言語学」第5章『国語学』第六四集・一九六六3）

（3）ソシュールは、言語学上の共時態について、次のように、述べている。「実践上では、言語状態というものは、一点ではなくて、そのあいだに生じた変更の総和が極少である、多少とも長さのある時間間隔である。それは十年でもよし、一世代でも、一世紀でも、さらにそれ以上でもかまわない。」（小林英夫訳『一般言語学講義』第Ⅱ編第1章・改版・一九七二）

（4）山崎久之「この二人の会話は、最初と「おめへさん」を使用するようになった後とは、明らかに表現が変わっていると考えられる。そしてその変化の理由は「あなたはモシ、衰微さんではごぜへませんか」と言うほど「一別来」の出合い（ママ）であったので、最初は他人行儀に用心して言っているのであるが、それが話しているうちに、昔の親しい心持になって、昔の表現に帰ったことにある。」（「江戸の庶民語の待遇表現の体系（一）――三馬の作品を中心として――」『群馬大学教育学部紀要、人文・社会科学編』第16巻・一九六六）山崎久之氏の〈論の進め方〉に、小島俊夫は、賛成しかねる。その理由

は、「他人行儀に用心して言っている」・「昔の親しい心持になって」とあるのが鼓八以外にはわからない領域であるからである。言語研究は、言語の個人的側面をできるだけ排除し、言語の社会習慣的な〈型〉を体系として構築することにある。このため、言語研究は、周到に集められた用例群に、支えられる。言語研究は、結論を急いで「他人行儀に用心して言っている」とか「昔の親しい心持になって」とかで、すませることではない。

(5) 小松寿雄氏は「階層を無視すれば……説明に窮するであろう。」(近代語研究・第七集・四一一頁) と述べているが、階層のみならず、言語行動の〈場〉を無視すれば、説明に窮するであろう。衰微の鼓八に対して用いる〈おら・貴公〉は、上位者から下位者への用法と見るべきでなく、幇間とその客すじの上層町人の間に見られる〈特殊な社会習慣の場〉でのみ許されるぞんざいな対等と見る方が適切であろう。

(6) 「わたくし抔はお得意様のお蔭様で、まづナ、おまへさん、他人様のお足をも歩せ申さず、ハイ〳〵、又外様へお払をいたゞきにもまゐらず、まことにナお前さん、ハイ〳〵、お節句前しらずでござります。」(浮世風呂・四編下)「お節句前しらず云々」ということから、俳助は、裕福な上層町人と推定され、「中層の上」ではなかろう。

(7) 小島俊夫「洒落本に推定される江戸市民の敬語体系」(『大坪併治教授退官記念国語史論集』・一九七六) 同『日本敬語史研究　後期中世以降』第二章 (一九九八)

(8) 〈ます・(でご)ざい)ます〉は、存在者としての話し相手に対する話し手の敬意の反映。小島俊夫『後期江戸ことばの敬語体系』第一章 (一九七四)

(9) やみ吉に対する月八のことばづかいに、「だみてゐやす・聴ました・いひました・出来やせう」(浮世風呂・四編下) の形式 (ます・やす) が混交し、そのことばづかいが段階 B_1 と認められるべき余地を有する。

(10) ぶた七・月八対やみ吉の会話の〈場〉から俳助対やみ吉の会話の〈場〉への急転が、もしも、事実に反して、この逆であると仮定したら、作品のおもしろさは、半減するのではなかろうか。

(11) 清「彼の所からかへ　米「ナアニこりやア去るお屋敷から到来サ (閑情末摘花・第三回)「お屋敷」＝大名屋敷

(12) 「随分有徳にくらせども」(閑情末摘花・第三回)「有徳」＝裕福

(13) この用例に限って見解を述べるとしたら、「お前――してお呉」は、段階 C_2 (上位の話し手が、下位の話し相手に対して、故意に、敬意を反映することばづかいをして、裏がえしの親愛を示す) の用法と考えることができる。だが、「どこを志してゆかしやる。」・「おまへも此ひしやくをもつて、浜松の御城下・在とも壱文づゝ貰つてこひ。」(夢酔独言・十四歳) のような用例が見いだされる。ゆえに、段階 B_1・段階 B_2 の形式による〈見せかけの対等〉という見解が選ばれた。段階 C_2 の用法は、上位の話し手が下位の話し相手に対して、故意に、敬意を反映することばづかいをするのであるから、その用例群は、必ず、「お前――(し) なされ」・「お前――(し) なさる」のような主述呼応の形式をとる。そこには、「おまへ――貰つてこひ」のような言い方は、無い。

敬語体系における言語行動の〈場〉の問題は、旧著『後期江戸ことばの敬語体系』(一九七四) に、箇々に、扱われた。それは、その索引にも、見られる。敬語体系を言語行動の〈場〉にしぼって論じる動機が与えられたことに、感謝する。

(こじま　としお)